

KWAN

名古屋大学大学院環境学研究科



敦煌の鳴沙山

April, 2002
創刊号

広報誌「KWAN(環)」の発刊にあたって

初代研究科長・名誉教授 小川克郎

名古屋大学大学院環境学研究科は2001年4月に創設されました。21世紀人類の生存を握ると考えられている環境問題に文理融合による広い視野から挑戦し総合的な環境学の創成を目指すことを創設の理念としています。具体的には環境学の広い視野を「自然(理学)」「物(工学)」「人(社会科学)の三要素から成るとして教育・研究のシステムを構成しました。そして、研究対象として「持続性学」と「安全・安心学」の二つの大テーマを進めています。前者は地球温暖化や循環型社会形成といったいわゆる環境問題ですが、環境問題とは表裏一体の関係にある資源・エネルギー問題を深く取り込んでいます。また、後者は地震・火山噴火や台風といった自然災害の予知・防災・減災を対象とします。

「文理融合」を第一の理念とすると第二の理念は「社会に開かれた大学」です。大学における研究は社会(大きく分けて、市民、行政、産業、学問)に役立って初めて意味があります。私達はこのことを常に確認しつつ教育・研究を進めてゆくつもりです。とり分け、防災・減災にみられるように、東海地域との連携は重要だと考えています。

本誌は本研究科の広報誌ではありますが、「社会に開かれた大学」という私達の理念実現の一環として、「大学から社会へ」並びに「社会から大学へ」の双方向のチャンネルを目指すものとしても企画しました。環境問題は全ての国民の問題でもあります。読者の皆様も私達と共にこの困難な問題に挑戦してゆこうではありませんか。

広報誌「KWAN(環)」の発刊にあたって	1
西のかた陽関をいずれば	3
黄砂の源を訪ねて - その1	7
専門知識と素人	12
転任にあたって	15
官僚とダイオキシン	17
総合的な学習で町づくり	18
事務部の窓	19
創設から2年目を迎えて	22

西のかた陽関をいずれば

溝口常俊 社会環境学専攻・地理学

まず、失敗談を語らねばならない。

2001年10月20日、中国西部ウルムチの新疆大学で開催された日中地理学会の合同発表会でのことである。9月中旬に日本からのメンバーが足りないので急遽参加してくれないかとの誘いに軽くのってしまったのがこの始まりである。中学時代、スエム・ヘディンの「さまよえる湖」のラジオ放送が耳に残り、高校時代に読んだ井上靖の『敦煌』の舞台についてに行けるのか、との期待感のみで、義務づけられていた発表なんて頭の片隅にもなかった。さて、入国3日目の当日。特別何かのテーマに関するシンポジウムでもなく、各自の研究成果を数十分話せばいいとのことであったので、まだ記憶がさめやらないカナダ・ケベックでの国際歴史地理学会で8月に話した内容(近世日本の中心周辺論)をほぼそのまま発表した。聴衆約30人の内、何人ぐらいが私の英語でのつたない発表を理解してくれるのだろうか、と考えながら話すという余裕さえあったが、終了後、司会者から、「ところで、あなたの発表は現在の中国西域の開発にいかなる貢献をすることができるのですか」という、予期しない質問が飛んできた。「えっ」とかすかな声を発しただけで20秒間沈黙。日本の学会でなら「貢献などしません。そういう目的での研究ではありませんから」と即座に答えたであろうが、ここは中国、招待された身である。そのままストレートに答えたら申しわけない、では、なんて答えよう、などとあれこれ考えていて、結局答えられずじまい。その場は他の発言に助けられたが、冷汗ものであった。

そういえば、似たような質問をかって発せられたことを思い出した。85年、初めてのバングラデシュ調査で、定期市での聞き取りを重ねていた時、地元民にあなた達の調査は我々にとって何か役に立ちますか、と。その問いに「アカデミックな調査ですので、直接役には立ちませんが」と何とも空しく小さくつぶやかざるを得なかった苦い経験があった。新疆大学は中国西部の開発プロジェクトの拠点大学であったことを知り、わが発表も場を鑑みて少しは提言ばいことを盛込むべきであったのかと反省することしきりであった。中国側の発表は全員、自分の研究プロジェクトがこんなに国家から予算を獲得し、いかに国家、

人民の為になるかを蕩々と述べる内容であったし、その後訪問した蘭州の氷河・砂漠研究所、北京の地理科学与資源研究所、北京大学での交歓会での中国側の話も100%それに準じていた。

いきなりKOを食った出だしであったが、学会後1週間の中国遊覧の旅は実に有意義であった。ウルムチ、トルファン、敦煌というシルクロードのオアシス都市での見聞を2、3紹介して、いやな思い出を忘れることにしよう。

氷河と砂漠の町というキャッチフレーズで売りだそうとしているウルムチを後にしてバスで2時間東に向えばトルファンに着く。その間、ゴビの砂漠を走るハイウェイは快適で、左手に油田の櫓が火を噴き、右手には風力発電機の3枚プロペラが回っている。いずれも西部開発の象徴だ。一瞬、砂漠に残雪かと思ったのは、実は塩であって、その広がり半端ではない。途中製塩工場を目にしたときは感心もしたが、この塩との戦いが、過酷な気象条件以上に砂漠での農業開発の最大の課題である。地下の人工水路カレーズが引かれた所のみが防風林に囲まれた葡萄畑や綿作地となって生れかわっているが、そうしたところは砂上の一画にすぎない。さて、トルファン。交河故城、『西遊記』で孫悟空が活躍する火焰山、1泊ではこの2カ所しか行けなかったが史跡が多く、歴史ファンにはたまらない町だ。朝市あり、夜市あり、将棋する男達、洗濯する女達、ロバの荷台に揺れる若夫婦、干しぶどう売り・・・、10月のトルファンの町は何時間ぶらついていても厭きない。その日の夜、イスラムの割礼の儀式の日で一族郎党がダンスパーティーを繰広げている式場にまちがって入り込み、ビールをご馳走になる。ウイグルファンになった日でもあった。

夜汽車で敦煌に向う。早朝、敦煌の鉄道駅から市街地まで、砂漠の中をまっしぐら。マイクロバスの中から前を見ても後ろを見ても一直線の道路が地平線に消える。それが延々と2時間続く。砂漠の灌木トマリスクのみがかすかに生命を感じさせてくれる。町に近づいたもののまだまだ砂漠のまっただ中におわんを伏せたような高まりが点々とみえた。お墓だという。砂漠の民が眠るのはやはり砂漠なのか、と感じ入ったり、市街地の中では地価が高くて墓は設営できないと聞き、興ざめたりもした。

この砂漠の地にすでに光ファイバーの敷設がなされているのに目をみはりもしたが、これと並行して砂岩でできた漢代の狼煙台が東方に向って延々と残っている。ラクダの糞は軟弱で使いものにならないが狼の糞を燃やすと煙がまっすぐ上に登る、だから「狼煙」というのだというガイドの講釈を興味深く聞きつつも、北京まで3日で情報が伝達されたというのに驚く。2000年前という時代を考えれば、これは光に匹敵する速さといってよからう。独自のGIS「超図」は開発されているし、携帯電話の普及台数はアメリカを抜いて世界一である。今も昔も中国のITにはかなわない。

シルクロードは敦煌を拠点に3ルートに分れる。タクラマカン砂漠の南縁をホータンを経て西に進む南路、砂漠北縁をローラン、カシュガルへと続く中路、それに天山山脈の北麓をウルムチ経由で走る北路である。いずれも中国とヨーロッパを結ぶ東西の路である。その南路を1時間半西に走ったところに古代の関所「陽関」(写真1)がある。唐の詩人王維が「西のかた陽関を出づれば故人無からん」と、友が安西都護府(トルファン)へ官命で出張するのを見おくって詠んだ詩に登場する関所である。この関に立って西を見渡したが、故人(親しい友)どころかトマリリスクさえも見えないタクラマカンの岩石砂漠が波打って地平の彼方に延びている。そんな地の果てを越えて行くのだから、まあ飲めや、と王維は先の句の前句で「君に勸む更に尽くせ一杯の酒」と勧めたのである。



写真1

中国内地から見れば西の果てであるが、外から多数入る人もまたいたはずである。この骨董市でヒンズーの女神「カーリー」の小型ブロンズ像(写真2)が目にとまった。夫シバ神に乗り陶酔状態で悪魔の首の血をしたたらせている像は、グロテスクではあるがベンガルの民の守護神であり、私のインド・バンラデシュでの延一年余のフィールドワークの際に最も魅せられた神でもあった。それがヒマラヤの高峰を越えてインド、ベンガル地方から渡ってきたのである。昨今、海のシルクロードを加え東西のルートのみを目を奪われているが、南北のシルクロードを再評価すべきではなかろうかと思う。かつて三蔵法師が通った路、河口慧海が旅した路の復元である。敦煌の莫高窟の主役はインドの神々ではないか。改めて陽関から西のかたをながめると、9月11日のニューヨーク貿易センター破壊というテロ事件の報復として米軍がアフガン攻撃中である。とても南西ルートのパミール越えてインドには行けない。しばらくは南東ルートを極めるしかなかろう。幸い、中国は国を挙げてチベットに大鉄道路線を敷設しようとしている。SLに揺られて天上のシルクロードを南下する旅をいつか実現させたいものである。再見&謝々。



写真2

黄砂の源を訪ねて—その1

甲斐憲次 地球環境科学専攻

1 はしがき

中国の西域には、タクラマカン砂漠やゴビ砂漠などの大砂漠があり、その中にオアシスが点在する。古くは、オアシスをつなぐシルクロードを經由して、東西の交流が行われた。私が『西域』に興味をもちはじめたのは、30年以上前にさかのぼる。高校時代の夏休み、課題図書として『天平の薨』(井上靖)を読んだのが切っ掛けだった。遣唐使として、当時の世界の中心地である唐の長安(現・西安)に派遣された若い僧侶が苦勞の末、貴重な仏典を日本に持ち帰るというストーリーである。読後、大きな感銘を受け、井上靖の西域もの『敦煌』、『楼蘭』、『蒼き狼』などを読んだ。そうして、私の西域に対するイメージが形作られた。

その後、自然科学(気象学)の職を得て、2度にわたって西域の調査に行くことになった。第1回目の調査は、天安門事件の直後の1991年冬である。当時、中国は開放政策を取り始めたが、10数億の民の生活は決して豊かではなかった。そして2回目は、2001年秋である。この10年間で中国と日本を取り巻く環境が大きく変わった。ここでは、現地調査を交えながら、中国現地の様子を紹介したい。

2 第1回目の訪中 - 天安門事件の直後 -

中国西域では、気候変動と人間活動による砂漠化が深刻な環境問題となりつつあった。1989年度から、日本の科学技術庁と中国科学院による科学技術振興調整費「砂漠化機構の解明に関する国際共同研究」が開始された。当時、筑波大学地球科学系に在職していた私は、この研究の中で、砂漠化に関する気候学的調査を担当した。

1990年、天安門事件で一時中断していたプロジェクトが再開された。1991年2月、タクラマカン沙漠への現地調査が計画され、気象研究所、筑波大学、中国科学院、アメリカ大使館、アメリカ科学アカデミー北京事務所のスタッフを中心に合同調査隊が編成された。現地では、中国科学院の新疆生物土壤砂漠研究所のスタッフが加わる。私がこの調査に参加したのは、砂漠化という現象に対する学問的興味のほかに、西域にぜひ

行って現地の様子を自分の眼で見てみたいという、学生時代の憧れがあったからにほかならない。

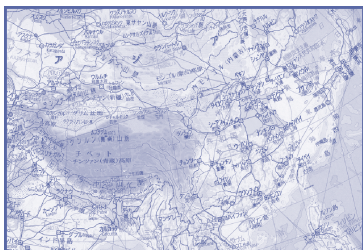


図1 アジアの地図 二宮書店、高等地図帳より

私は地図帳を開いて、タクラマカン砂漠の位置を調べた。北を天山山脈、南を崑崙山脈に囲まれたタリム盆地の中に、広大なタクラマカン砂漠がある。タリム盆地の東端に楼蘭・敦煌、西端にはカシュガルがある。地図帳では茶色に塗られて、人は住めそうもないという印象を受ける。面積は日本がすっぽり入る大きさである。行政的には新疆ウイグル自治区にあり、首都は天山山脈北側のウルムチ市である。私は調査計画を立てるとき、現地の様子をフィールドノートに記録し、写真に撮ることが大切と考えた。1眼レフのカメラと予備のコンパクトカメラ、そして30巻のフィルムをスーツケースの中に入れた。

3 フォトグラフィー

調査中のフィールドノートより、印象に残った写真を紹介したい。

写真1:天安門広場前

2月17日13時50分、成田から北京空港に到着。中国科学院と国家海洋局のスタッフによる出迎えがあった。旧正月のせいか、人通りが少ない。タクシーや車、そしていつもなら道路にあふれる自転車もかなり少ない。広大な天安門広場は閑散としていた(写真1)。1989年6月、この場所で天安門事件が起きた。



戒厳令は1990年1月まで続いた。その後、中国政府は開放政策を進めた。

写真2:天山山脈と
タクラマカン砂漠

2月19日22時40分、



ウルムチ空港に到着。飛行場の気温は - 27 で、雪がうっすらと積もっていた。息をすると、胸が痛くなるほど寒い。石炭の臭いがする。23時30分、新疆招待所食堂で歓迎会が催される。かなり遅い気もするが、北京とウルムチの時差が約2時間あるので、この時刻はウイグル時の夜9時30分である。アメリカ大使館のアンドレー・オナート科学技術顧問、アメリカ科学アカデミー北京事務所のジョン・オルソン氏も参加する。

2月20日9時15分、ホータン行のプロペラ機CA9911に搭乗。アクス・ホータン行の表示は中国語とウイグル語が併記されている。プロペラ機は飛行高度が低く、天山山脈が間近に見える。山肌は険しく、雪が多い。9時45分、天山山脈の向こうにタクラマカン砂漠が姿をあらわした(写真2の左手)。



写真3:大砂丘にて

2月21日15時00分、ホータン着。15時30分、昼食後、ホータン市内を見学する。まず、絨毯工場。若いウイグル族の女性が絨毯を編んでいる。若いウイグル族の

女性は漢民族よりも派手で、スカートをはいている。スカーフもカラフルである。作業風景を撮影する。街角でビデオをとっていると、子供達が群がってくる。

ホータンの街は砂塵が漂って、どろんとくもっている。タクラマカン砂漠の南縁にあり、砂塵がとにかくすごい。そして、多くのウイグル族の人々が住んでいるのは驚きだ。人口は10万人くらいであろうか。

写真3はシーラの大砂丘である。大砂丘の比高は30m。この砂丘はもっとも規模が大きく、タクラマカン砂漠に来たという実感がある。気候学的研究によると、タクラマカン砂漠には2つの大きな風系があり、このあたりで収束し、巨大な砂丘を形成する。

写真4：シーラ地区政府
招待所食堂での昼食



13時30、迎いのジープがきた。このあと、シーラ政府招待所でこの地方の政府の代表者と昼食会があった。写真4の中央は吉野教授、その左がシーラ地区政府代表者、左端がアメリカ大使館のオナート氏、右端はアメリカ科学アカデミー北京事務所のオルソン氏である。肉料理がメインディッシュである。特に、シシカパブーはこうばしくて、うまい。

昼食の時、オルソン氏、オナート氏と中国での調査について話をした。オルソン氏は考古学と文化人類学が専門で、タクラマカン砂漠における過去の水路網を調べているという。衛星のLANDSATやSPOTを用いて、タクラマカン砂漠を見ると、砂塵嵐の影響で地面はよく見えないという。私とその砂塵嵐を研究していると話をしたら、おもしろそうに聞いていた。

写真5：ホータン気象台

2月22日10時30分。ホータン気象台を見学する。観測項目は地温(地表面、地下5,10,15,20,40,80,160,320cm) 風、気温、湿度、降水量、蒸発散、凍土である。写真5に示すように、観測圃場にはおなじみの百葉箱などがある。1950年代のソ連製の測器が使用されている。小型のパソコンで地上気象とラジオゾンデのデータ整理を行っている。天気予報の確率は、70～80%だそうである。1日8回観測し、原資料はここに保管される。毎日のデータより月平均値を出し、ウルムチの気象台に送る。農業気象に関しては、作物の生長状況の監視が中心である。強風などが予想されるときは、その予報をテレビ・ラジオに流す。

中国全土に同様の気象台があり、同じ規格で観測された大



量のデータがある。この調査では、どのような気象要素がどのくらいの頻度で観測されているかを調べ、対象地域の気象資料を収集することが大きな目的の一つであった。

写真6:ウイグル族の民族舞踊

2月22日、夜の9時過ぎ、ウイグル族の民族舞踊を見学。合同調査隊のため、特別に企画されたものである。カラフルな民族衣装を身にまとったウイグル族の女性が舞台にあらわれる。オーケストラもある。女性の舞がこんなにも美しいものかと感動した。音楽もリズム感があっていい。ただ驚き。これまでの疲れがとれたような気がする。特にメインダンスをした女性は、気品があって、とてもよい。この人たちのダンスはきっと、日本や北京でも通用するだろう。



4 あとがき

調査日程は1991年2月17日 - 3月3日の2週間である。寒波の通過した2月19日、ウルムチ空港に到着した。最低気温は -27 であった。これからの調査の厳しさを暗示するような寒さであったが、終わってみると、プロペラ機による天山の山越えとタクラマカン砂漠の横断、ウイグル族の民族舞踊、ウルムチのバザールなど心に残る興味深い調査になった。

10年後の調査の様子は、次回紹介したい。

専門知識と素人

西澤泰彦 都市環境学専攻

環境学研究科を立ち上げる議論が本格化した2000年の春、私は、当時所属していた工学研究科建築学専攻の教務関係の担当をしていた関係から、環境学研究科のカリキュラムなどを話し合う教育サブ・ワーキングに顔を出すこととなった。カリキュラムの議論を煮詰めていく過程で話題にのぼったのが、環境学研究科としてどのような人材を輩出するかということだった。理学、工学など既存の種類の種類学位取得者なら、それに応じた職業も推察可能で、研究者、技術者、教員、公務員、という具合に輩出する人材も予想できる。しかし、新たにつくる環境学という学位の取得者がどのような職業に就けるのだろうか、という疑問をその場にいた方々は皆、同じように持ってしまった。「環境政策、環境行政を変えるために官庁に人材を送り込もう」という主張もあり、それも重要であることは誰も認めた。

そのとき、私は「専門知識を持った素人」という提案をした。この理由は二つあった。ひとつは、大学院での専門が職業と結び付くという従来の発想を打破したいということ。もうひとつは、職業とは無縁にボランティアなどで市民活動に参加する人が増えていることに大学も対応すべきであると考えたからである。市民参加型の社会システムがあちこちで試みられている現在、従来のように専門知識を披露するだけで何も判断しない「専門家」に頼ることなく、市民自身が自ら判断することの重要性が増しているのは間違いなく、そのためには市民自らが専門知識を持つことが重要になると思ったからである。そして、この直後、私は、専門知識を持った素人の偉大さに接することとなった。

私は、まったく同じ時期に、愛知県が取り壊そうとしていた愛知県立旭丘高校の校舎再生運動に取り組んだ。従来の建物保存運動ではなく、建設廃材の抑制を主とする環境問題やスクラップ・アンド・ビルドの社会システムの打破、文化遺産をまちづくりの資産として生かすこと、校舎再生による工事費軽減という複数の視点を提示し、賛同者を募って市民団体を立ち上げた。署名活動やピラ配り、愛知県知事や関係部局担当者との意見交換、愛知県議会への働きかけ、といったありふれた活動のみならず、再生案の提示、シンポジウムの開催、耐震診

断費用の寄附、取り壊し禁止の仮処分申請、文部省や文化庁、国会への働きかけ、そして、取り壊し寸前の校舎近くでの座り込み、という具合に、多様な運動を展開した。結果として、校舎は取り壊されたが、実質的には10ヶ月続いた運動の中で感じたことの一つは、このような運動は、専門知識を持った素人によって支えられる、ということだった。

私は、運動を始めた時から、運動の広がりを考えて、先に示した複数の視点のみならず、建物としての校舎のすばらしさをわかり易く語る努力をしてみた。その結果、運動のそれぞれの局面で多大な活動をしてくれた方々の多くが、それを理解し、かつ、口コミで他の人々に語る場面に出くわした。その知識は正確であり、かつ、わかり易い説明であった。それは、私の口から発せられた言葉をそのまま受け入れて、他者に伝えているのではなく、それぞれの方々が、私の説明を理解し、自分のものとして身に付けた知識であり、校舎を再生させてみたいという意思の賜物であった。

これが、運動の終盤に至って大きく影響した。取り壊し工事決行の情報を得た私は、この運動に主体的に参加していた仲間とともに、工事阻止と愛知県教育委員会との話し合いを求めて、旭丘高校正門前の路上での座り込みを決意した。「旭丘高校校舎を登録文化財にしよう」という幟を用意して、座り込んでみると、驚いたことに、一緒に座ってくれた近所の人、近所の住宅では玄関先にその幟を立てて支援を表明してくれた人、という具合に支援してくれる方々が現れた。そして、彼らや彼女らは、報道関係者の取材に気軽に応じて、記者たちに専門家と同じ口調で、校舎のすばらしさや校舎再生の意義を語ったのであった。この光景に出くわした私は、専門知識を持つ素人の重要性を改めて認識した。彼ら彼女らは、私の受け売りではなく、自らの判断で、校舎の再生を考えているのであるからこそ、自信を持って行動を起こし、自らの言葉で校舎再生の必要性を語り始めたのだった。

結局、2000年の年末に校舎の取り壊し工事が始まり、翌春、校舎は地上から消えた。しかし、私は、専門知識を持った素人の偉大さを感じ取ることができた。偶然とはいえ、環境学研究

科の設立とこの校舎再生運動が重なったことは、私にとっては意義深くもあり、楽しい経験であった。

その経験を持って、今、私は併任という形態で、内閣府に務めている。素人を愚民とみなす官尊民卑の権化のような霞ヶ関に居ると、「霞ヶ関の常識は世間の非常識」を強く感じるが、それならばいっそ、「霞ヶ関の常識」という非常識に風穴を開けることに、今までの経験を生かしてみようと思う。幸い、私の所属するグループには、炭鉱で発破経験のある度胸のある方もいるから心強い。この成果は、また、機会あれば、披露したい。もちろん、各地で頻発している建物の保存再生運動の成果もお伝えしたい。



転任にあたって

月日が経つのは早いもので、私が1996年4月に名古屋大学情報文化学部へ赴任して6年が過ぎました。この度2002年3月をもちまして京都大学経済研究所へ転任することとなりました。本学に職を頂きましてからというもの、忙しい毎日を送っておりましたが、充実した毎日を送ることができましたのも、少しでも恵まれた研究環境をとご配慮、ご努力頂きました講座の諸先生方や、研究遂行上必要な様々な事務手続きをして頂きました職員の方々のお陰であると大変感謝いたしております。と同時に、自分はお世話になりっぱなしで名古屋大学を去ることになり、申し訳なさも感じております。

名古屋大学における私の最初の所属は前にも書きましたとおり、情報文化学部でございました。その後2001年4月に諸先生方へ大変なご努力の甲斐あって環境学研究科が設立されました際に、私もその一員に加えて頂きました。主たるテーマこそ異なるとはいえ、どちらの部局もその特徴のひとつに「文理融合」という目標があり、多彩な分野からの先生方が一堂に集うという、既存の研究分野の枠を超えた組織でした。私自身は経済学出身ですが、やはり普段接するのは同分野の先生方であることが多く、正直に言って現実的にはなかなか実際に「融合」を果たすことは困難であるという印象はぬぐいきれませんでした。しかし、折に触れて他分野の先生方とお話する機会を得て、異分野における価値基準や基本的なものの考え方といった、既存学部においては接することの難しい面に触れることができたのは、自分にとって大きな収穫だったと思っております。今後、実際に「環境」という共通の問題に対して既存の学問の融合を図り、実際にそこから新しい学問分野を構成していくという作業は、現環境学研究科のスタッフはもとより、現在及び将来の大学院生が中心になって、すでに立ち上がりつつある分野の垣根を越えたプロジェクトを進めていく中で、一步一步実現されていくことと期待しております。

本研究科は国内で最も新しい研究科であり、学問的に、あるいはそれ以上に現実社会に対しても担う役割は大変大きなものがあると考えます。社会に開かれた大学のあり方という点でも本研究科が扱うトピックは可能性、必要度共に非常に高く、

関係する様々な情報を対外的に発信することができる広報誌を創刊することは大変意義あることと思います。

最後に今後の環境学研究科の益々のご発展と教職員各位のご清祥、また学生諸氏のご活躍を祈り退官の挨拶とさせていただきます。

2002年2月

社会環境学専攻 環境経済論講座 西山慶彦

この4月から名古屋を離れて新たな土地に赴くことになる。「我々はただ過去をも背負うのみならずまた風土をも背負うのである」という和辻哲朗の言葉を引くまでもなく、名古屋での一日一日が今の私を形作ってきたわけで、それはこの地を離れた後ひしひしと感じられるようになるのだらうと思う。離れがたい様々なつながりがようやく出来かけたこの時期に去ることは皮肉なものであるが、えてして人生そのようなものであろうとも思う。

さて、その最後の一年間を環境学研究科という新たなる試みのなかで過ごさせていただいた。大学がこれから大いなる変革の時期を迎えるにあたって、それを先取りしたようなこの大プロジェクトを、身近に体験できたのは幸運であった。それは困難に直面するたびに、次々と繰り出される諸先生方の知恵に対する感嘆の連続であった。

遠くの地より研究科の益々の発展をお祈りしたい。

最後に、考えるところあって北の地へと赴くわけであるが、思い返せば浮かぶのはお礼の言葉ばかりである。仕事を通じてお会いできた皆さまに心から御礼を申し上げたい。有難うございました。

社会環境学専攻 社会環境規範論講座 廣部泉

“ごみ”と“ダイオキシン”をめぐる権力構造
「官僚とダイオキシン」

杉本裕明 著



風媒社 ISBN4-8331-1050-4

地球環境問題が70年代に頻発した公害と異なるのは、全球的に及ぶ影響の大きさにある。私たちは現在、物質循環を前提とした未来社会への入口に位置している。ゴミ処理は個人が自覚的に循環型社会を築くために避けて通れない関門である。ゴミ焼却施設と廃棄物処分場は大気・地下水汚染という問題を抱えており、公害と地球環境問題の結節点に位置している。ゴミ処理問題は、環境問題であると同時に、社会・政治・経済の問題でもある。行政の質が問われると言っても過言でない。

名古屋市民に身近な例は、平成11年1月に計画が断念された藤前干潟の埋立事業である。名古屋市のゴミの量は、平成8年度には100万トン余に達し、分別・焼却された後、25万トン余を岐阜県多治見市の愛岐処分場に埋め立て処分していた。名古屋市民が出すゴミ埋立量は年間1人当たり150kg程度で推移してきた。因みに、分別回収が徹底した碧南市の年間1人当たりゴミ埋立量は14kg程に過ぎない。

人口200万を超える大都市で数年以内に処分場が満杯になるという予測のもと、新しい処分場計画が断念に追い込まれる切迫した展開が、『官僚とダイオキシン』第一章のプロットである。時代を見通せなかった地方行政の計画を覆した市民・NGOと環境庁の成果ではある。本書が抉り出す現実を凝視しながら、政治家と官僚あるいは研究者の果たさなければならない役割は、あるべき「未来」を具体的に提示することだと改めて確認した。

藤前断念を受けて名古屋市は分別回収に取り組み、平成13年度にはゴミ量が80万トンを超える見込みとなった。名古屋市が環境モデル都市と呼ばれるようになったのは、アイロニーか。それにも増して、都会における快適な「文明生活」を送るために各自が支払うべきツケをどこに廻すのか、迷惑施設問題が発する市民個人への問いは重い。

【評:都市環境学専攻 市川康明】

「総合的な学習で町づくり」

寺本 潔 著



明治図書 ISBN4-18-169500
1560円 B6版

都市計画は江戸時代以来、日本では御上の仕事とされ、専門家が行うものであった。しかし、その状況が現在では大きく変わり、行政は都市計画に対して市民へ意見を求めるようになった。ただ、これまで大多数の市民は自分の暮らすまちがどのように計画され、運営されているのかを考える機会はありませんでした。

そのような問題意識に立脚して、『総合的な学習で町づくり』は、西尾市の西尾小学校を舞台に、「総合的学習の時間」を利用して繰り広げられた「まちづくり学習」の実践を中心に紹介している。そして、著者は小学生時代から自分に暮らすまちを考える機会が必要であり、学校教育でも「まちづくり学習」に取り組むべきであると主張している。

「総合的学習の時間」とは、2002年度から小中学校で、2003年度には高等学校で新たに実施される授業科目である。総合的な学習の時間は各学校の地域や生徒の実態に応じて教育活動を行い、生徒の主体的に学び、考える態度を育成するねらいを持つ。国際理解や情報、環境、福祉などの学習が総合的課題の例として示されており、「まち」を題材として総合的学習を組み立てることもできる。

西尾小学校の教育実践では、「まちづくり学習」の小学1年生から6年生までの一貫したカリキュラムを組み、発達段階に応じた課題を提供できるように工夫されている。低学年ではまちに「愛着」を持つことが課題であり、次は「共感」、そして「参加」、最後に「提案」となっている。最後の提案では、小学6年生がかなり現実的なプランとして「西尾のまち改造計画」を提案した例が紹介されている。

「総合的学習の時間」を経て、「まち」や「環境」を主体的に学び考えてきた学生が、近い将来、大学に入学する。その学生たちは、今まで以上に主体性を持った研究活動を行うに違いない、という想像をかきたたせるのが本書である。

【評：社会環境学専攻地理学講座 大西宏治】

事務部の窓

このたび、環境学研究科広報委員会(委員長:大川睦夫教授)の下で検討が進められていた研究科広報紙「KWAN(環)」が創刊されることになりました。事務部に紙面の割り当てをいただいたので、本誌に「事務部の窓」を開設し、事務部が保有する各種情報、データ、主なニュースなどを適宜掲載していくことにします。「事務部の窓」の掲載内容等に関してご要望・ご意見などあれば事務部広報担当(庶務掛:岡田)までお寄せください。

【DATA BOX】

教官数

(平成14年4月1日現在)

専攻名	教授	助教授	講師	助手	計
地球環境科学専攻	16	13	0	11	40
都市環境学専攻	19	12	1	9	41
社会環境学専攻	20	12	2	3	37
附属地震火山観測研究センター	3	4		3	10
計	58	41	3	26	128

学生数

(平成14年4月1日現在)

専攻名	(博士前期課程)			(博士後期課程)			
	定員	1年	2年	定員	1年	2年	3年
地球環境科学専攻	54	51 (15) <6>	57 (9) <5>	25	21 (5) <2>	22 (6) <2>	-
都市環境学専攻	47	47 (13) <2>	75 (11) <7>	21	15 (4) <4>	23 (4) <7>	-
社会環境学専攻	36	37 (18) <1>	32 (10) <2>	18	14 (7) <2>	26 (12) <5>	-
計	137	135 (46) <9>	164 (30) <14>	64	50 (16) <8>	71 (22) <14>	-

()は女子、 は外国人留学生を内数で示す

【教職員の異動】

3月31日付け、4月1日付けで次の方々が異動されました。
(定年退職)

H14.3.31 小川 克郎 大学院環境学研究科長
地球環境科学専攻
地球環境システム学講座教授

(転出)

H14.4.1 永井 久也 都市環境学専攻

- 都市持続発展論講座助教授
(三重大学工学部助教授へ)
- 〃 西山 慶彦 社会環境学専攻
経済環境論講座助教授
(京都大学経済研究所助教授へ)
- 〃 廣部 泉 社会環境学専攻
社会環境規範論講座助教授
(北海道大学大学院文学研究科
助教授へ)
- 〃 齋藤 勝行 環境学研究科・地球水循環研究センター
会計掛長
(医学部・医学系研究科学務課研
究協力掛長へ)
- (転入)
- H14.4.1 河合 崇欣 地球環境科学専攻
地球環境システム学講座教授
((独)国立環境研究所主任研究官から)
- 〃 杉浦 良幸 環境学研究科・地球水循環研究センター
会計掛長
(医学部管理課第一用度掛長か
ら)
- (採用)
- H14.4.1 井口 治夫 社会環境学専攻
社会環境規範論講座助教授
(同志社大学アメリカ研究所助教授から)
- 〃 木平 英一 地球環境科学専攻
地球環境変動論講座助手
- 〃 市井 和仁 地球環境科学専攻
地球環境システム学講座助手
- 〃 岩松 将一 都市環境学専攻
都市持続発展論講座助手
- 〃 吉永 美香 都市環境学専攻
建築・環境デザイン講座助手
- 〃 矢野美奈子 環境学研究科・地球水循環研究センター
大学院担当事務補佐員
- (昇任)
- H14.4.1 原田 昌幸 都市環境学専攻
都市持続発展論講座講師
(建築・環境デザイン講座助手から)
- (併任)
- H14.4.1 久野 覚 環境学研究科長(任期2年)
- 〃 田上英一郎 評議員(任期2年)
- 〃 藤井 直之 附属地震火山観測研究センター
長(任期1年)

【学位授与第1号】

3月25日に挙行された名古屋大学卒業式(学位授与式)で、本研究科創設後最初の修士学位、博士学位が、次の2名の方に授与されました。

修士学位

- ・授与者 : 陳 寧(女) 1971.10.18生(中国)
- ・専攻 : 都市環境学専攻
- ・専攻分野 : 環境学
- ・授与年月日 : 平成14年3月25日 環境修第1号
- ・主論文題目 : Application of FDCD and CD Spectroscopy for Determination of Chiralities of Biologically Important Pteridines
(FDCDおよびCDスペクトルを応用した生物学的に重要なプテリジンのキラリティーの決定)

博士学位

- ・授与者 : 吉永美香(女) 昭48.2.12生(愛知県)
- ・専攻 : 都市環境学専攻
- ・専攻分野 : 環境学
- ・授与年月日 : 平成14年3月25日 環境博第1号
- ・主論文題目 : 太陽光熱ハイブリッドコレクタを用いた太陽エネルギーの有効利用に関する研究

<原稿募集>

本誌は名古屋大学環境学研究科の広報誌ですが、内部外部を問わず原稿を広く募集しています。「環境」をキーワードにしたものであれば、内容は問いません。文字数についても自由ですが、長いものは連載になります。(事前に広報委員へご相談いただくと助かります。)読み物として面白いものを採用したいと思います。

名古屋大学大学院環境学研究科広報委員会
阿部 理・市川康明・大川睦夫・大西宏治・岡田佳代子・
平原康大・森 博嗣

koho@env.nagoya-u.ac.jp

<編集後記>

委員会では、紙の印刷物を作ることに消極的だった。これからの時代、こういうものを創刊するというのは、環境的にもマイナスではないか、こんなことにエネルギーを使いたくない、という議論が当然あった。できれば、それを乗り越えるプラス面が生まれれば、と願うばかりである。なお、内容に関しては、すべてHPでも読めるようにする予定なので、そのうち自然に紙媒体はなくなるかもしれない。しかし、メディアではなく、問題はコンテンツだ、ということをお忘れのようにしたい。周囲を見渡すとあまりにも飾りが多過ぎる。(文責:森)

KWAN「環」創刊号

名古屋大学大学院環境学研究科広報委員会

2002年4月発行

<http://www.env.nagoya-u.ac.jp>

創設から2年目を迎えて

環境学研究科長 久野 覚

2001年4月に創設されて1年が過ぎました。初代研究科長の小川克郎名誉教授が定年退官されて、2代目研究科長となりました。創設期ですので当然ながら、この一年、研究科内外で様々の出来事がありました。大事なくここまで来ました。短縮修了の博士(環境学) 修士(環境学)取得者も出ました。

教育システムとして、専攻間を繋ぐ研究科共通科目として設定された体系理解科目も一通り第一年目が終わり、色々苦勞しながらも段々良くなっていくだろうと思っています。同様に研究科全体で行う連携研究プロジェクトの方も、中頃から後半になって多くのシンポジウム・研究会などのイベントが開催されるようになってきました。これから益々盛んになって行くであろうと思います。

このような教育研究システムは、新しく「持続性学」「安全安心学」を創って、こうという研究科の理念によるものですが、横型、連携融合型学問領域の形成という理念の一方で、縦型、従来型の学問領域の継承を行い、縦と横を両方行ってバランスを取りながら「名古屋大学環境学」を発展させるということも研究科の理念として掲げています。

この広報誌には様々な分野の紹介がなされることと思いますが、この理念にしたがっています。外に対しては本研究科をご理解いただくために、内に対しては益々の活性化を図るために、活用されればと思っています。

